The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	日本語、ヒンディー語における他動・使役性
Author(s)	西岡, 美樹
Citation	日本語・日本文化. 2003, 29, p. 85-113
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/8127
rights	本文データはCiNiiから複製したものである
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

＜研究論文＞

日本語、ヒンディー語における他動・使役性

西岡　美樹

0. 前提

日本語の使役構文といわれるものには二種類ある。一つは使役接辞「せる」「させる」（または文語の「す」「さす」「しむ」）を任意の動詞に付加した使役動詞を使用する使役構文であり、もう一つは、語の複合による迂言表現「ようにする」「ーてもらう」によるものである。このように、日本語の使役表現には二つの方式があるわけだが、動詞形態そのものを観察すると、使役接辞を生産的に付加するものとは別に、自動詞が使役接辞を内包して他動詞になったり、他動詞に使役接辞が内包されて使役動詞になっていたりすることが分かる。

これと同じことが、印欧語族の末裔ヒンディー語にも観察される。ヒンディー語では、現在、動詞の語幹に付加される接辞には‘-ā’、‘-vā’の二種類がある。この二つは自動詞、他動詞のそれぞれに他動性[1]もしくは使役性を加える接辞である。また、他の使役表現として、日本語のように語の複合により使役の意味表わすものもある。

本稿は、個別言語の研究に徹するだけでは明らかになることがなかった類似点、相違点を浮き彫りにするため、両言語の動詞と接辞付加で生じる他動性や使役性（以後、他動・使役性と呼ぶ）について観察し、実例をもとに、語彙としての使役動詞を使った使役構文、また語の複合による使役表現についても両言語を比較しながら分析、考察するものである。

なお、本論に入る前に断っておくが、本稿における自動詞、他動詞の定義は、自動詞を「その動詞のみで文が完結するもの」、他動詞を「少なくとも一つ以上の対象を要求し、概ね対象は「を」格を取るもの」とする。改めて議論することなく公理扱いで議論を進めていく。

1. 単一動詞の例示と考察

まず両言語の自動詞、他動詞、および使役動詞について概観する。日本語の使役動詞は未然形語幹に使役接辞「ーせる／させる」を付加する。ヒンディー語の使役接辞 '-vā' は、自動詞、他動詞語幹に付加して生産的に使役動詞を作ることができる。なお、ヒンディー語の動詞の例は、不定詞の '-nā' 語尾のものを掲載する。

1.1 自動詞型

a. 使役接辞「ーせる／ーさせる」を内包した語彙動詞

日本語			ヒンディー語		
乗る	乗せる	乗らせる	caṛhnā	caṛhānā	caṛhvānā
似る	似せる	似させる	śakal milnā	なし[2]	なし
寝る	寝かせる	寝させる	sonā	sulānā	sulvānā

ここで挙げた「乗る」「似る」には、未然形語幹に生産的に使役接辞を付加した「乗らせる」「似させる」とは別に、「乗せる」「似せる」という、自動詞の未然形語幹に「ーせる」接辞を内包させた動詞が存在する。前者はあくまで生産的なものなので辞書に一語彙として掲載されることはないが、後者は語彙動詞として辞書に掲載されている。これらはともに「～に…を」となる二重目的語を取る二重他動詞として使用される。残りの「寝る」という動詞も出自は自動詞であり上二つとよく似た形態だが、語彙化した「寝かせる」は必ずしも「に」格を要求しないので、二重他動詞とはいえない。

ここで挙げた三つのうち、「似る」から派生した「似せる」だけが、通常使役接辞を付加した「似させる」と同義と『広辞苑第四版』に記されている。また、「似せる」と「寝かせる」については、「似るようにする」「寝るようにする」という形式名詞「よう」を含んだ複合形式、すなわち迂言表現も併記されている。

これら三つの語彙動詞に共通していえることは、生産的なものではない、接辞が語彙化した動詞が、「他人にある行為をさせる」（上掲辞書）という使役ではなく、「他人」の部分が「自身」に置き換えられる、すなわち再帰的な使役になっていることである。「他人」による使役は、通常の使役接辞を付加したものにその役

割を負わせており、これがヒンディー語の自動詞語幹に‘-ā’接辞を内包する語彙動詞と‘-vā’接辞を付加する文法的使役動詞の機能分担による使い分けとなるのである。

ここで少しヒンディー語の動詞について少し述べておくが、接辞の‘-ā’、‘-vā’は音韻規則で許される限り生産的に付加できるもので、その付加されたものがそれぞれ一語彙動詞として辞書に掲載される。‘-ā’は自動詞語幹に付加されて他動詞になることが多いが、これが他動詞に付加される場合、複雑な使役性の問題が生じる。ヒンディー語学の文法では、すべてが語彙動詞のように扱われ、接辞まで言及されることはほとんどないが、共時的対照研究の便宜のために、本稿では‘-ā’を他動・使役接辞、‘-vā’を使役接辞と分けて呼ぶ。

b. 旧使役接辞「ーす／さす」を内包した語彙動詞

寝る	寝かす	寝させる	sonā	sulānā	sulvānā
泣く	泣かす	泣かさせる	ronā	rulānā	rulvānā
笑う	笑かす	笑わせる	haṁsnā	haṁsānā	haṁsvānā
満ちる	満たす	満ちさせる	bharnā	bharnā	bharvānā

a. の「ーせる／させる」接辞を使用したものとは違い、旧使役接辞（文語の使役接辞）を内包した語彙動詞がこの **b.** である。**a.** にも出てきた「寝る」は「ーせる」を使用した「寝かせる」という形態を持つと同時に、「ーす」を使用した「寝かす[3]」も持つ。他にも「泣く vs. 泣かす」「笑う vs. 笑かす」がある。この「泣かす」「笑かす」と等価値のもので、「ーせる」接辞を付けた規則どおりの変化形のものがある。最下段の「満ちる vs. 満たす」については、ヒンディー語は、自動詞、他動詞が同形[4]になっている。

c. 使役接辞「ーせる／させる」を生産的に付加するもの

日本語		ヒンディー語	
行く	行かせる[5]	jānā	—
来る	来させる	ānā	—
いる	いさせる	honā	—
ある	—	honā	—

なる	ならせる	honā bannā	なし banānā/banvānā
生じる	生じさせる	paidā honā	paidā karnā karānā/karvānā
座る	座らせる	baiṭhnā	biṭhānā/biṭhvānā
入る	入らせる	praveś karnā	praveś karānā/karvānā
走る	走らせる	dauṛnā	dauṛānā
降る	降らせる	barasnā	barsānā

ここで挙げたものは、先ほどのような語彙化した動詞を持たず、使役接辞「ーせる／させる」を生産的に付加するもののみの自動詞である。中には使役接辞さえ付かないものもある。日本語は「ある」という動詞のみで、「*あらせる」は、形態として作り出せるが、実際見聞きすることはない。一方、ヒンディー語には使役接辞の付かないものがいくつかあるが、‘jānā’「行く」の語幹 ‘jā-’、「なる」‘honā’ の ‘ho-’ など、長母音語幹のものが多い。音韻の問題とも考えられるが、前項の ‘sonā’「寝る」は、長母音語幹でも他動詞、使役動詞の形態を持っているので、長母音語幹が原因というわけではなさそうである。むしろ、他動化が可能な動詞かどうかが鍵になっているものと推察されるが、本稿ではこの議論に触れないでおく。

ところで、ヒンディー語では、日本語のように「行く」「来る」のように生産的に使役接辞を付加することはできないが、使役の意を表わす手段がないわけではない。‘bhejnā’「送る」（便宜的に「送る」としたが、ヒンディー語では人にも物にも使用可能な動詞）や ‘bulānā’「呼ぶ」（結果として「来させる」と等価値になる）という具合に、意味上の補充形で表わすことができる。

その他、「入る」「生じる」のヒンディー語 ‘praveś/paidā honā vs. praveś/paidā karnā’ のように名詞もしくは形容詞と動詞「なる vs. する」の述語複合によって表現するものもある。以後、ヒンディー語の二語の複合形式はすべてこの類である。

1.2　自他対応型

ここでは、自動詞と他動詞が対で存在するものを列挙する。語彙的な「ーす」を内包した動詞群 **a.** と、生産的な「ーせる」接辞の動詞群 **b.** に大別して掲載するが、紙面の都合上、生産的に付加される使役接辞の動詞形態は省略する。

a.　旧使役接辞「ーす／さす」を内包した語彙動詞

日本語の場合、自動詞、他動詞が対応する型は形態によって四つに分けられる。**a-1** には「-reru/-eru」語尾の自動詞を「-su/-asu」語尾に変えて他動詞を形成するもの、**a-2** には「-ru/-u」語尾の自動詞を「-su/-asu」に変えるもの、**a-3** には「-iru」語尾の自動詞を「-osu」語尾に変えるものを順に挙げていく。また、**a-4** には、語幹自体が母音交代するものを挙げる。

a-1

日本語		ヒンディー語	
壊れる	壊す	ṭūṭnā	toṛnā
倒れる	倒す	girnā	girānā
流れる	流す	bahnā	bahānā
放れる	放す	chūṭnā	choṛnā
離れる	離す	dūr honā	dūr karnā
濡れる	濡らす	bhīgnā	bhigānā
燃える	燃やす	jalnā	jalānā
生える	生やす	paidā honā	paidā karnā
増える	増やす	baṛhnā	baṛhānā
逃げる	逃がす	bhāgnā	bhagānā
笑う	笑わす	haṁsnā	haṁsānā
冷める	冷ます	ṭhaṃḍā honā	ṭhaṃḍā karnā

a-2

回る	回す	ghūmnā	ghumānā
戻る	戻す	lauṭnā	lauṭānā
余る	余す	bacnā	bacānā
減る	減らす	ghaṭnā	ghaṭānā
飛ぶ	飛ばす	uṛnā	uṛānā
乾く	乾かす	sūkhnā	sukhānā

動く	動かす	calnā	calānā

a-3

起きる	起こす	uṭhnā	uṭhānā
閉じる	閉ざす	baṃd honā	baṃd karnā
落ちる	落とす	girnā	girānā
降りる	降ろす	utarnā	utārnā

a-4

消える	消す	bujhnā	bujhānā
出る	出す	nikalnā	nikālnā

ここで挙げた型の他動詞には、いずれも共通して '-su' が付加されている。1.1の自動詞のb. にもあったが、この共通項の「ーす」は「する」という語彙動詞から接語（clitic）→接辞へと拘束形式化したものが、任意の動詞に他動・使役性を加えるために膠着するものと仮定すると、ヒンディー語の動詞形成と平行して考え易い。ヒンディー語の例は、語幹に '-ā' 接辞を付加して他動詞を形成しているものである。中には 'ṭūṭnā vs. toṛnā' のように語幹自体が変化するものもあるが、数としてはこちらの方が圧倒的に多い。数の問題はともかく、この '-ā' 接辞は、日本語の「ーす」と出自は違うが、他動・使役性を加える機能を持つ接辞という点は否めない。ここに筆者が '-ā' 接辞を「ーす」と同機能の他動・使役接辞である呼ぶ理由がある。また、両言語とも、その一方で生産的な使役接辞 '-vā' や「ーせる／させる」を併せ持っているのも興味深い言語事実である。

次の b. には、上の a. のように成分分析できない自動詞、他動詞の対のものを挙げるが、これらも辞書に掲載済みのもので語彙化している。b-1 は '-u' 語尾の動詞を '-e' に変えて '-ru' を付加したもの、b-2 は '-aru' 語尾の動詞は、'-a' 母音を '-e' に変化させるものである。

b. 語彙型

b-1

開く	開ける	khulnā	kholnā
進む	進める	baṛhnā	baṛhānā

立つ	立てる	khaṛā honā	khaṛā karnā
届く	届ける	pahuṁcnā	pahuṁcānā
浮かぶ	浮かべる	bahnā	bahānā
並ぶ	並べる	なし	なし

b-2

受かる	受ける	pās honā	parīkṣā denā
助かる	助ける	bacnā	bacānā
曲がる	曲げる	muṛnā	moṛnā
見つかる	見つける	milnā	khojnā
閉まる	閉める	baṃd honā	baṃd karnā
止まる	止める	ruknā	roknā
泊まる	泊める	ṭhaharnā	ṭhaharānā
閉まる	閉める	baṃd honā	baṃd karnā
始まる	始める	āraṃbh honā	āraṃbh karnā
終わる	終える	samāpt honā	samāpt karnā
変わる	変える	badalnā	badalnā

ここに挙げたヒンディー語の例を見てみると、二語を複合しているものが多い。基本的には形容詞と「なる／する」動詞の複合だが、中には 'āraṃbh honā/karnā' 「開始される／する」のような、名詞と「なる／する」の複合が見られる。また、「受かる vs. 受ける」に挙げたヒンディー語の例は、形態での対応はできないので、「パスする」と「試験を受ける[6]」と言い換えた。

ところで、b-2 の型には例外がいくつか見られる。それらを b-2' として挙げる。

b-2'

預かる	預ける	lenā	denā
教わる	教える	paṛhnā	paṛhānā
授かる	授ける	milnā	denā

これらは、どちらも「を」格の対象を要求する他動詞である。特に、「Y から X を」および「Y に X を」という対象を二つ要求する二重他動詞になっている。吉川（1989）の『日本語文法入門』の中では「預かる vs. 預ける」を、形態の対立

から前者を自動詞、後者を他動詞としているが、本稿ではどちらも他動詞として扱う。というのは、「を」格の対象を要求するという他動詞の定義に適っているからである。ヒンディー語の方は、「教わる」以外は、意味対応になっている。

しかし、これらの動詞は、**b-2** の動詞と同じ形態変化で自他対応をしているのに、なぜどちらも他動詞なのだろうか。実際、「預かる vs. 預ける」を観察してみると、二つとも「物を一時的に保管する」という意味は共通だが、対象となる物と主語である行為者のベクトルが相対していることが分かる。「預かる」は行為者が対象を受け取るのであり、逆に「預ける」は行為者が対象を他人に渡す（与える）のである。「教わる vs. 教える」も同様で、知識や学問等を「(受け) 取る」か「与える」の違いである。同じ形態変化をした動詞であっても、**b-2** のように他動性が指標になっていない。**b-2'** の動詞群では「やり取り」という行為のベクトルが指標になっているのである。三つ目の「授かる vs. 授ける」をみると、これは「やり取り」そのものだが、この動詞には、上二つと違って行為者と相手の立場・身分の上下が新たな指標として加わる。

1.3 中動動詞型

ここでは自動詞、他動詞のみならず自動性の強い中動態の動詞形態（以後、中動形）を持つものを観察する。

日本語			ヒンディー語		
売る	売れる	売らせる	becnā bikānā	biknā	bikvānā
折る	折れる	折らせる	toṛnā	ṭūṭnā	tuṛānā tuṛvānā
切る	切れる	切らせる	kāṭnā	kaṭnā	kaṭānā kaṭvānā
知る	知れる	知らせる	jānnā	受動形	janānā janvānā
焼く	焼ける	焼けさせる	jalānā	jalnā	jalvānā
漏る	漏れる	漏らせる	risnā	risnā	なし
破る	破れる	破らせる	phaṭānā phāṛnā	phaṭnā	phaṛānā phaṛvānā

日本語の中動形は、受身接辞の「ーれる／られる」の「ーれる」を内包した語彙動詞である。一方のヒンディー語は、'kāṭnā vs. kaṭnā'「切る vs. 切れる」のような、語幹自体が母音交代を起こすものと、'jalānā vs. jalnā'「焼く vs. 焼ける」のように、日本語では中動形に当たるものの語幹に、他動・使役接辞 '-ā' を付加するものという二つのタイプが主である。また、「知る vs. 知れる」については、ヒンディー語では一語で相当するものはなく、形容詞もしくは名詞と動詞の複合による迂言表現か受動形[7] を使用する。

1.4　他動詞の他動・使役化型

ここでは他動詞が、使役接辞により他動・使役化される例を挙げる。

a. 使役接辞「ーせる／ーさせる」による他動・使役化

日本語			ヒンディー語		
着る	着せる	着させる	pahannā	pahanānā	pahanvānā
見る	見せる	見させる	dekhnā	dikhānā	dikhlānā
知る	知らせる	知らさせる	jānnā	jatānā (janānā)	jatlānā

これらももはや成分分析ができない語彙動詞である。同様の形態変化をするものが自動詞派生のところにもあったが、その場合「ーせる」接辞を付加すると他動性が現われ、素直に他動詞として振舞うことができる。ところが、「着る、見る、知る」は元来他動詞なので、更なる他動性を加えると使役性が出現する。そうなると、これらには二種類の使役動詞が生じることになる。一つは生産的な使役動詞、もう一つは語彙動詞になっている再帰的な使役動詞である。例えば「A が B に C を見せる」の場合、A が他人にさせるのではなく自身が再帰してその行為に及ぶ。逆に「見させる」になると他人にその行為をさせるということになる。ヒンディー語を見ると、日本語と同じように、他動詞語幹に他動性を与える接辞 '-ā' を付加すれば再帰使役動詞ができあがる。また、一般の使役接辞 '-lā'[8] を付加すると他人を介する使役になる[9]。

次に、a. の使役接辞の代わりに旧使役接辞を使用したものを見てみよう。

b. 旧使役接辞「ーす／さす」による他動・使役化

食べる	？食べさす	食べさせる	khānā	khilānā	khilvānā
飲む	？飲ます	飲ませる	pīnā	pilānā	pilvānā
聞く	？聞かす	聞かせる	sunnā	sunānā	sunvānā

旧接辞を付加した上記の形態は、口語または方言的な感がある。標準日本語では「ーせる／させる」の使役動詞の方に再帰使役も含めた用法を負わせているが、ヒンディー語は他動・使役接辞（真中列）のものが再帰使役動詞であり、語彙として定着している。

1.5 他動詞の使役化型

ここでは他動詞に生産的に使役接辞「ーせる／させる」を付加し、使役動詞を形成するものを挙げる。

する	させる	karnā	karānā/karvānā
入れる	入れさせる	praveś karānā	praveś karvānā
与える	与えさせる	denā	dilānā/dilvānā
置く	置かせる	rakhnā	rakhānā/rakhvānā
書く	書かせる	likhnā	likhānā/likhvānā
話す	話させる	bolnā	bulānā/bulvānā
読む（学ぶ）	読ませる（学ばせる）	paṛhnā	paṛhvānā
教える	教えさせる	paṛhānā	paṛhvānā
囲む	囲ませる	ghernā	ghirānā

ヒンディー語には他動・使役接辞と使役接辞の両方の形態があるが、前者の接辞を付加したものは非標準語扱いをされることが多い。なお、ここの「読む」'paṛhnā' とその下段の「教える」'paṛhānā' は 1.2 の **b-2'** にも「教わる vs. 教える」で挙げたが、前者は、ここでは日本語の別語彙に相当するものである。

1.6 自他同一型

最後に自動詞と他動詞が同じ形態である、自他同一型の動詞を挙げる。

閉じる	閉じる	baṃd honā	baṃd karnā

「風で本が閉じた。」「僕は本を閉じた。」のように、「閉じる」は自他同一の動詞である。ヒンディー語のこの型には **'khonā'**「失わせる vs. 失う」、**'bhūlnā'**「忘れられる vs. 忘れる」、**'badalnā'**「変わる vs. 変える」（1.2 の自他対応型に掲載）等があるが、英語のように自他同一型が動詞類型において大半を占めるようなことはない。

2. 述語複合による他動・使役化

ここでは述語複合による他動・使役化について観察する。以下では、述語になりうる名詞、形容詞、動詞ごとに見ていく。

2.1　名詞－動詞複合型

日本語では、名詞を複合する場合、動詞「する」を使用するが、その時、複合する名詞には「に」格を付与する。つまり、基本的な構文として「Y にする」という構文が成り立つことになるが、Y に代入される任意の名詞にも種類があるので、以下ではそれらを分けて説明しよう。

a.　一般名詞

「可能、大切、幸せ、ばか、中心、にぎやか」等々、代入可能な名詞は枚挙にいとまがない。そして、この場合必ず「を」格表示の対象を要求する。

例：「両親を大切にする。」「宇宙旅行を可能にする。」「僕をばかにする。」

これらには、「両親が大切（だ）」「宇宙旅行が可能（だ）」「僕がばか（だ）」という具合に、名詞が述語となっている命題が成り立つ。その命題文が Y に埋め込まれた場合、主語が「を」格の対格で表示される。また、名詞によっては、あたかも名詞複合動詞と化したような「きれいにする」「大切にする」等があるが、これらも「部屋がきれい（だ）」「思い出が大切（だ）」という命題を埋め込んだもので、本来はこの形式に則ったものである。しかし、使用頻度が高くなると、名詞と動詞の複合による語彙性の度合いが強くなるようである。

b. 形式名詞

また、日本語には動詞「する」と形式名詞を複合するものがある。形式名詞「よう」を含む「ようにする」が代表的な複合形式である。「ことにする」の「こと」も形式名詞だが、「他人にある行為をさせる」という意味にはならないので、ここでは扱わない。「ようにする」は、先の一般名詞の場合と違い、形式名詞「よう」には動詞述語文が同格のものとしてそのまま埋め込まれなければ成立しない。すでに1.1で「寝るようにする」「似るようにする」を挙げたが、ここで改めて「寝るようにする」を例に、この構造を観察し、その他動・使役性を検証してみよう。

a) 母親は子供が寝るようにする。

b) ？母親は子供を寝るようにする。

c) 母親は子供が寝られるようにする。

d) ？母親は子供を寝られるようにする。

e) 母親は子供を寝かせるようにする。

a）は文を「よう」の同格節としてそのまま埋め込んだもの、b）は、a. の一般名詞に観察されたように埋め込み文の主語を「を」格の対格表示したもの、c）は「寝る」に可能を表わす「ーられる」接辞を付加した文をそのまま埋め込んだもの、d）は c）の埋め込み文の主語を対格表示したもの、e）は埋め込みの述語動詞自体を「寝かせる」という使役にしたものである。a）が標準的な文で、再帰使役動詞の「子供を寝かす」と同じ意味になる。b）のように名詞述語文の時のように主語を対格に変えるとおかしな感を受ける。「X を Y にする」という構造の Y に「寝る」だけを埋め込んだと考えればいくらか可能な文となるが、本来「よう」の場合は a）の同格節を取るのが普通である。にもかかわらず、埋め込み文の主語を対格表示させると「X を Y にする」の構造を取らせることになる。英語の場合、例えば 'She made him feel at ease.'「彼女は彼を安心させた。」の 'make' の目的語として動詞述語文を埋め込み、その主語を対格表示することで使役[10] を表現するが、日本語の複合形式の場合は、同じ操作で「Y に」の部分に動詞述語文を埋め込み、その埋め込み文の主語を対格表示で失業者にすることはできないのである[11]。

次に、c）の埋め込み文の述語動詞に可能接辞「ーれる／られる」を付加した派

生形を使用した例である。これは「子供が寝られる状態にする」ということになるが、再帰使役も含め使役性はあまり感じられない。d）はb）と同じく格表示を変えたものだが、やはりb）で述べた理由から若干おかしな感が残る。e）については「寝る」という行為を実行する「子供」は対格表示されているが、これは埋め込み文に使用されている使役動詞の「寝かせる」自体が「を」の対格を要求しているためである。

このように「ようにする」の場合、同格節を取ることが前提で「ーせる／させる」と同じ働きをするが、あくまで「その状態にする」という中立的な使役表現である。

最後になるが、日本語の「出発する」「航行する」のように自動詞派生の抽象名詞と「する」を複合させて自動詞として扱う名詞複合動詞と、「する」「破壊する」のような他動詞派生の抽象名詞と「する」を複合させて他動詞として扱う名詞複合動詞がある。ヒンディー語にもたくさん見られる形式であることを付言しておく[12]。

2.2　形容詞ー動詞複合型

次に、形容詞を複合するものを以下に例示するが、基本的な構文は以下のとおりである。

日本語

		なる
形容詞「ーく」	＋	する（なら＋せる）
		させる

ここで指す形容詞は、「大きい、高い、広い」のような人や物の属性を表わす属性形容詞と、「うれしい」「悲しい」のような感情を表わす感情形容詞である。これらは「大きくなる」「高くする」「うれしくさせる」という具合に形容詞の原形語尾「ーい」から連用形接続の「ーく」に変わる[13]が、これは形容詞述語文が埋め込まれたものである。埋め込みの手法も「父はテレビの音を小さくした。」のように主語を「を」格の対格表示する名詞の場合と同じである。一方のヒンディー

語も ‘acchā honā/karnā’「良くなる／良くやる」のような複合形式を持つ。

もう一つ、ヒンディー語には名詞－動詞複合型と同じぐらいよく使うものがある。それは、日本語にすると動詞を当てることしかできないもので、すでに 1.1 の表でもいくつか提示したのだが、改めてここでまとめておく。

‘khaṛā honā/karnā’	「立つ／立てる」
‘samāpt honā/karnā’	「終わる／終える」
‘kṣubdh honā/karnā’	「怒る／怒らせる」
‘prasann honā/karnā’	「喜ぶ／喜ば・す／せる」

ヒンディー語での扱いが形容詞となっているので、そのまま「形容詞」と呼ぶが、この種の複合を分解すると「終わった（状態に）＋なる／する」「喜んだ（状態に）＋なる／する」のようになる。「なる」との複合は自動詞として振る舞い、「する」と複合することで他動詞の振る舞いをさせる。ここに挙げたヒンディー語の形容詞にはそれぞれ ‘samāpti’「開始」、‘kṣobh’「怒り」、‘prasannatā’「喜び」のような派生名詞があるが、一つだけ ‘khaṛā’[14]「立った」については、現在関連する名詞も動詞も残っていない。

2.3 動詞－動詞複合型

日本語の使役構文において、動詞同士を複合するものに授受動詞によるものがある。授受動詞には「－てもらう／いただく」の他にも、「－てやる／あげる／さしあげる」があるが、「私は友達に宿題をやってもらった。」のように自分が他人を介して何かをさせるという、迂言的な使役の意味を持つのは「－てもらう／いただく」の方である。さらに「－てもらう／いただく」のうち「いただく」は「もらう」の謙譲語なので、本稿では「いただく」は扱わず「もらう」のみを扱う。また、ベクトルが「もらう／いただく」と同じであるが、行為者が自分以外になる授受動詞「くれる」についても触れる。

3. 実例分析

3.1　単一型の実例

これまで日本語とヒンディー語の動詞の形態と使役接辞について説明してきたが、ここでは実例を観察しながらそれぞれの言語を対照した場合の共通性・特異性について分析、考察する。

3.1.1　自動詞

まず、自動詞の語彙的使役動詞を使った例からである。

（1）　僕は新しく買った車に彼女を一番に乗せるつもりだ。

(1) は「乗せる」の例であるが、他動詞になるがゆえに「を」格を取る。また、これは「Y に X を」の二重目的語を要求する二重他動詞のようになっているが、二重目的語の「に」は与格といわれる。しかしながら、与格の「に」と位置格の「に」は関連性が高いのでこの「乗せる」という動詞は二重目的語を取る二重他動詞と呼んでも差し支えないであろう。ヒンディー語におけるこの動詞を用いた例は以下の (2) である。

（2）　vah　use　apne　rath　par　biṭhā　kar
　　彼　彼女を　自分の　馬車　に　乗せる—語幹　接続分詞
　　iṃdraprasth　kī　or　cal　paṛā.
　　インドラプラスタ　の　方向　歩く—語幹　生じる—過去
　　「彼は彼女を自分の馬車に乗せて、インドラプラスタの方へ発った。」

日本語の「乗る」から「乗せる」という形態を作り出し、それが語彙として固定化しているように、ヒンディー語の 'baiṭhnā' から 'biṭhānā'[15] という形態を作りだし、語彙動詞として使用している。平叙文にこの動詞を使う場合、位置格の名詞句（ここは「馬車に」）が必要になる。これが日本語の「に」格に相当する。

では、次に同じ自動詞の語彙的使役動詞で「寝かせる」の例を見てみよう。

（3）　車の中に子供を寝かせたまま買い物に行ってはいけません。

（4）　maiṃ　tumheṃ　lorī　gākar　sulāũṁgā.
　　私　君を　子守唄　歌う—語幹＋接続分詞　寝かせる—未来
　　「僕は子守唄を歌って君を寝かせよう。」

ヒンディー語の例に使用されている動詞 ‘sulānā’ も日本語の「寝かせる」もしくは「寝かす」に相当する。‘-ā’ 接辞の動詞形態で、使役動詞の主語が再帰する再帰使役になる。

もう一つ、「ーす／さす」接辞を内包した語彙動詞である「流す」の例を挙げる。

（5）　汚水を川に流し続けたために、川に魚が一匹もいなくなった。

（6）　… vah　śiśu　hai,　jise　usne
あの　赤ん坊　コピュラ—現在　関係詞　彼女＋能格
gaṃgā　kī　lahroṃ　meṃ　saṃdūk　meṃ
ガンジス川　の　波　に　木箱　に
sulākar　bahāyā　thā.
寝かせる—語幹＋接続分詞　流す—完了　コピュラ—過去
「彼女がガンジス川の波間に、木箱に寝かせて流したあの子である。」

これも「Y に X を」となっているが、「に」格は先ほどと同じ位置格である。ヒンディー語でも ‘bahnā’「流れる」の語幹に ‘-ā’ 接辞が付いた他動詞を使用している。

（7）　私は昨日道端で 10,000 円を拾ったので、警察に届けた。

（8）　vedvyās　jī　pāṇḍavoṃ　ko　ekcakrā
ヴェーダヴァーサ　敬称　パーンダヴァ　を　エーカチャクラー
meṃ　pahuṁcākar　cale　gaye.
に　届ける—語幹＋接続分詞　歩いて—完了　行く—過去
「ヴェーダヴァーサ仙はパーンダヴァをエーカチャクラーに送り届けて去っていった。」

上掲の「届ける」の例も、「届く vs. 届ける」の自他対応で、ヒンディー語の ‘pahuṁc’ に ‘-ā’ 接辞を付けて他動詞に変換したものと同じである。

3.1.2　他動詞

では、次に他動詞の使役形動詞を使った例を見てみよう。

（9）　さあ、子供にミルクを飲ませましょう。

（10）　batāie,　maiṃ　āp　ko　kyā　pilāuṁ?
云う—命令　私　あなた　を　何　飲ませる—仮・未来

「さあ、何を飲ませましょうか。」

「飲む」の対象になるものは「を」格になるが、「ーせる」接辞を内包した使役動詞は、「Y に X を」の二重他動詞になる。ヒンディー語も同じく「Y に X を」型になるが、前節の自動詞の時とは違い、位置格の 'meṃ' ではなく、与格の 'ko' が出現する[16]。

(11)　今度旅行の話を聞かせてくださいね。

(12)　rām!　tumhāre　ujjval　kul　kī　kathā
　　ラーマ　おまえの　輝かしい　一族　の　話
　　sunātā　hūṁ.
　　聞かせる—未完了　コピュラ—現在
　　「ラーマよ。おまえの輝かしい一族の話をひとつ聞かせよう。」

日本語の「聞かせる」とヒンディー語の 'sunānā' も互いに「ーせる」接辞および '-ā' 接辞を付けたもので、[他動詞の更なる他動化＝使役] の例である。主語は主文の主語が再帰する。したがって再帰使役である。

同じく知覚に関わる動詞「見る」の他動化「見せる」についても見てみよう。

(13)　僕は先生に旅行の写真を見せた。

(14)　yadi　āp　kī　anumati　ho　to　maiṃ
　　もし　あなた　の　許し　コピュラ—仮・未来　小詞　私
　　lakṣmaṇ　ko　nagar　dikhā　lāūṁ.
　　ラクシュマナ　に　街　見せる—語幹　連れて来る—仮・未来
　　「もしお許しがあれば、ラクシュマナに街を見せて来ます。」

「見せる」のヒンディー語の動詞も、もとの語幹に '-ā' 接辞を付けて[17] 表わすのは同じであり、「Y に X を」の二重他動詞になる。先の「聞かせる」と同じく「主語自身が先生（ラクシュマナ）に写真（街）をみせる」という再帰使役動詞になる。

今度は本来他動詞であるものに「ーさせる」接辞がついた例を挙げよう。

(15)　クラウディウスをだまして、彼の実子ブリタニクスではなく、彼女の連れ子ネロに後継者の地位を与えさせる。

(http://www.augustus.to/coin/ZZ_default_e_claudius.html

Internet; accessed 18 Jan 2003.)

(16) putreṣṭh yajña ke dvārā mujhe tejasvī putr
子宝 供儀 の 通じて 私に 素晴らしい 息子
dilāie.
与えさせる—命令
「子宝祈願によって私に素晴らしい息子を授けてください。」

日本語の「授ける」は「与えさせる」の意訳である。ヒンディー語は 'denā'「与える」に '-ā' 接辞が付いた動詞になっているが、この例は再帰使役ではない。(15) は「だます」という謀略行為、(16) は 'yajṇa'「供儀」が起因として現われている。これまでの使役と違う点は「与える」という動詞自体が既に「Y に X を」の二重他動詞で、更なる他動・使役性を付加すると更に別の起因を要求するようになる、というところである。

3.1.3 接辞型使役動詞

ここからは使役接辞を生産的に付加した動詞の例を観察する。まずは自動詞の使役動詞の例を挙げよう。

(17) 雨が降っていたので、今日は子供をタクシーで学校に行かせた。

(17) は「を」使役文の例だが、この場合埋め込み文の主語は対格表示される。一般的に、使役には強制、許容・許可等の意味があるといわれるが、ここは強制の意が強いものである。許容や許可の場合、主語の格表示には「に」格が現われることが多い。統語構造を分析すると「子供がタクシーで学校に行く」という命題の文が「ーせる」という接辞の目的語として埋め込まれる。したがって、基底に「X を Y にする」という論理構造を構えることになる。これにより、行為者の意志が反映されないで強制の意味が具現される。

(18) 私は子供に映画を見に行かせた。

(18) は、同じ使役文でも強制、許容・許可のどちらでも解釈できる例文である。先の「子供がタクシーで学校に行く」という命題文の主語は、埋め込まれた後に対格の「を」で格表示されていたが、この例文では主語が「に」格表示されている。論理構造を考えると、子供に対し「映画を見に行く」という行為を与え

る、つまり「YにXを与える」のXにのみ従属文の埋め込みがなされるわけで、これが意味の上で許容・許可となって具現されるのである。その際、埋め込まれた従属文の主語は、冗長的なので表記しなくてよい。これに関連したものとして、「ーさせてやる」の例文も見てみよう。

(19)　私は子供に映画を見に行かせてやった。

「やる」という動詞を使うと、許容・許可の意味のみになる。これは、「やる」が行為を「与える」ということを明示するからである。このような「やる」（もしくは「あげる／さしあげる」）をオプショナルとして付けなくても、「に」格を要求するこの使役には「YにXを与える」の論理構造が喚起されやすく、結果、(19)のように許容・許可の意味が生まれるものと考えられる。

次に他動詞派生の使役動詞について観察してみよう。

(20)　＊私は子供を御飯を食べさせる。

(20) のように「を」格が連続することは叙述文ではないが、「私は御飯を食べさせる。」や「私は子供を食べさせる。」のように、対象を一つ欠落させれば適格な文になる。前者は「食べる」が「を」格を要求し、後者は使役接辞が要求している。後者の使役は再帰にも他人を介するものにもなりうるが、基底に「XをYにする」の論理構造を持つ。また、前者の使役は通常以下のようになる。

(21)　私は子供に御飯を食べさせる。

この場合は「与える」型の使役が成立するので、文脈によって強制もしくは許容・許可のどちらの意味もありうる。

まとめると、(17) と (20) に見られた、強制が働く使役を「する」型使役、(18) と (21) に観察された、「Y に X を与える」が基底の論理構造になって許容・許可を表すものを「与える」型使役と呼ぶことができる。

ところで、ヒンディー語の場合、この二種類の使役を表わすには構造自体をはっきり違える。まず「する」型使役の例を挙げよう。

(22)　duryodhan　is　yojnā　ke　anusār　puraṃjan
　　ドゥルヨーダナ　この　計画　の　もとに　プランジャナ
　　ke　dvārā　lāh　kā　ghar　banvāne　lagā.
　　の　通じて　ラック　の　家　作らせる—不定　かかる—過去

「ドゥルヨーダナはこの計画のもとプランジャナにラック塗りの家を作らせた。」

これは、ドゥルヨーダナ王子が家臣プランジャナに命令するところだが、家臣プランジャナは拒否権を発動する立場になく、また自身が計画を提案して実行の許可をもらったわけでもない。したがって、この文が許容・許可の意味を持つものではないことは明らかだが、では強制の意味を持つのかというとそうではない。この例文、すなわちこの構造は、他人（もしくは物）が起因していることを示しているだけである。強制の意味は二次的に発生する文脈の問題であり、強制の意味を文中で明らかにするには、それに相当する句（例：「無理やり」）を挿入するか、他の迂言表現（例：「～することを強いる」）を使う。

次に、許容・許可を与えて行為に及ばせる使役の例を見てみよう。

(23)

maiṃ	tumheṃ	un	kī	kamī	kabhī	mahsūs	nahīṃ
私	君に	彼女	の	不足	いつでも	感じた	否定辞

hone	dūṅgā.
なる―不定	与える―未来

「決しておまえに母親がいないことを感じさせないよ。」

ヒンディー語で許容・許可を得てものごとを行う時に「与える」という動詞そのものを使用して、「Y に X を与える」の構造に X に従属文を埋め込む。先の他人を介するものとは文構造が違い、また許容・許可の意味が具現されることも理解しやすい。

このように、日本語は同じ使役動詞を使い、行為者の格表示を区別することで「する」型と「与える」型の使役に分かれるが、ヒンディー語は文構造自体がまったく違うのである。

3.2　複合形式

3.2.1　名詞－動詞複合型

この節では、第 2 章で観察した名詞、形容詞、動詞の複合形式の実例を提示しながら分析を試みる。

まず、名詞の複合形式について見てみよう。

(24)　息子を医者にした。

この文は、「息子が医者だ」という名詞述語文を「X を Y にする」の Y として埋め込んだものである。

これと同じ複合形式のヒンディー語は、次のようになる。

(25)　arjun　ne　use　baṃdī　banā　liyā.
　　アルジュナ　能格　彼を　囚人　作る—語幹　s 取る—過去
　　「アルジュナは彼を囚われの身にした。」

「X を Y にする」という場合、ヒンディー語では 'banānā'「作る」を用いるが、埋め込まれる名詞述語文の主語の格表示は対格である。この「作る」という 'banānā' は、第 2 章でも掲載したとおり '-ā' 接辞を付加した他動詞である。元々 'bannā'「作られる／なる」であり、'banānā' 他動接辞を付加して「なら・せる」となったものである。

(26)　うちの息子は医者になった。

(27)　merā　beṭā　ḍākṭar　ban　gayā.
　　私の　息子　医者　なる—語幹　行く—過去

「うちの息子が医者だ」＝ 'merā beṭā ḍakṭar hai'「Y になる」に埋め込まれたものである[18]。さらに、「する」に「－せる」を付加して使役性を増やした「息子を医者にさせたい[19]」という表現も見られる。意味は（24）と同じである。

3.2.2　形容詞－動詞複合型

次に、形容詞の複合形式の実例を考察してみよう。

(28)　問題に立ち向かわない教育の後ろ姿は、社会を悲しくする。
　　（『琉球新報』（朝刊）2001. 3. 15）

(29)　そのニュースがさらに私を悲しくさせた。

これらは形容詞の「－く」形＋「する／させる」動詞を使用したものである。定延（2000）が使役形態素の余剰的具現ということで「一郎が花子を悲しくする」vs.「一郎が花子を悲しくさせる」という、使役形態素が合理的計算よりも一つ多く具現する現象を指摘しているが、ヒンディー語にもそれが見られる。

(30) Bhagīrath ne phir ghor tapasyā kī
バギーラタ 能格 また 激しい 苦行 する—過去
aur bhagvān śiv ko prasann kar
そして 神 シヴァ を 喜んだ—形 する—語幹
liyā.
取る—過去
「バギーラタは再び激しい苦行をし、シヴァ神を喜ばせた。」

(31) gaṃdharv ke kathan ne arjun ko kṣubdh
ガンダルヴァ の 話 能格 アルジュナ を 怒った
karā liyā.
させる—語幹 取る—過去
「ガンダルヴァの言ったことがアルジュナを怒らせた。」

(30) は、「シヴァが喜んだ」に当たる形容詞述語文を「する」動詞の目的語として埋め込んだものである。論理的にもこれで日本語の語彙化した使役動詞の「喜ばす」と等価値になる。ところが、下の文は「させる」の目的語として「アルジュナが怒った」を埋め込んだものになっている。このような使役の場合、「する」の目的語として埋め込んだ (30) の方が普通だが、実際、論理的にも使役性の必要はないはずのものが、ヒンディー語でも表現することがある。

ところで、ヒンディー語に比べると、この使役余剰は日本語の方が圧倒的に多いが、実際のところ、これが余剰的な機能になっているのであろうか。以下の例を見てみよう。

(32) 最近 DVD プレーヤーを購入しうれしくしている。

(http://www.geocities.co.jp/MusicHall/2028/
Internet; accessed 18 Jan 2003.)

(33) 子供たちが、とてもうれしくしているのでよかったなと心から思えました。

(http://www.hicat.ne.jp/home/nkathu/hitori2002.04.html
Internet; accessed 18 Jan 2003.)

この二つの例の「うれしくしている」という表現の「うれしくする」に「X を

――くする」の構造が果たして当てはまるだろうか。実際、「を」格の語句は文中にはないし、「うれしくしている」の前にある「DVDプレーヤーの購入」という部分を「を」格の補完部にしてみても「*DVDプレーヤーの購入をうれしくしている。」とはいえない。「DVDプレーヤーの購入」もあくまで「うれしくする」の原因にしかならないからである。

では、「を」格の省略語として再帰代名詞を充ててみてはどうか。

最近DVDプレーヤーを買って［自分自身を］うれしくしている。

子供たちが［自分自身を］うれしくしているのでよかったな…。

ロマンス諸語では、他動詞が再帰代名詞を伴って自動詞のような働きをさせることがある。つまり「私は私自身を起こす＝私は起きる」のような解釈をここで当てはめてみると「自分自身をうれしくする＝うれしくなる」となる。しかし、これはあくまで基底に他動詞構文が潜んでいることを前提にすることになる。少なくとも、再帰代名詞が可視的に存在している言語ならばこれでよいが、日本語はそうではない。実際のところ、基底の他動詞構文を想定する必要もないのである。以下を見られたい。

(34)　医者：どうしました。
　　マナ：昨日からおなかが痛いのです。　（『初級日本語』）

(35)　田中さん：お久しぶりです、佐藤先生。
　　佐藤先生：ああ、久しぶりですね。最近、どうしていますか。
　　（『初級日本語』）

この中の「どうした」の「した」、「どうしている」の「して」は「する」の変化形であるが、これは他動詞ではない。自動詞「なる」の代替として使われている代動詞である[20]。したがって、「どう」の代わりに「うれしい」という形容詞を「する」に複合した時も、代動詞として自動詞の代わりをしているのである。そう考えれば「うれしくする」にさらに使役接辞「ーせる」が付くのは自然な過程である。つまり「うれしくする[21]」が全体として自動詞のように捉えられると、「うれしくする」の「する」が持つ他動詞的な残光では使役性が欠落してしまうので、もう一つ使役接辞を付けて補うと考えれば理に適う。従って、一見余剰にも見えるこの現象は、複合形式の語彙化にその答えを求めることができるのである。

3.2.3　動詞－動詞複合型

最後に動詞の複合形式の実例を分析するが、第2章でも述べたように、結果として他人が行為を行うことになる意味の複合形式「もらう」を中心に観察する。

(36)　私は小さい頃、父に色々なところに連れて行ってもらった。

(37)　私たちはみなさんに原子力を身近に感じてもらいたいのです。

日本語の「－て」＋「もらう」は、主語が主語自身の利益になることを別の行為者がする場合に使用される動詞である。(36) は、私を色々なところに連れて行ったのは「に」格の「父」であり、そのことが私自身にとって有益だったということを述べている。(37) の「感じて」の主語は「みなさん」であって、その利益を被るのは「みなさん」ではなく、「私たち」である。埋め込み文となる「みなさんが原子力を身近に感じる」の主語は、埋め込まれた後、「に」格で表示される。「もらう」という動詞は、元々その動詞の持つ「①贈り物を受ける。②人に請うて自分の物とする。」(『広辞苑第四版』) の意味が、具体的な「贈り物」や「物」から「利益」という漠然としたものに変わり、「主語にとって利益を与える行為をする」という抽象的な意味のみを残したベクトル動詞[22] である。これは、埋め込み文の行為者は利益を得る者以外がなるという特殊な動詞だが、他人に物事を行わせる点で使役表現といえる。

これをヒンディー語にする場合、「Y のために Z が X をした」または複文の「Z が X をして Y が利益を受けた」と叙述するしかない。「Z は Y に X をしてもらう」のように、利益を得る者が主文の主語になり、なおかつ行為者がその主語以外という複雑な埋め込みをした使役表現は、ヒンディー語には見当たらない。

このように「－て」＋「もらう」については、ヒンディー語には等価値の動詞もなく複合形式でも表わすことができないが、本動詞となる「－て」の部分に「－せる／させる」を付けると、意味が一致する複合形式がヒンディー語にある。以下にその例を挙げる。

(38)　maiṃ　kām　karne　nahīṃ　pāyā.
　　私　仕事　する―不定　否定辞　得る―過去
　　「私は仕事をさせてもらえなかった。」

(*Prayog aur prayog*: 201)

(39)　āṁsū　jo　bahne　na　pāye
　　涙　関係詞　流れる—不定　否定辞　得る—過去
　　「流させてもらえなかった涙」
　　(http://www.angelfire.com/ab/rajji/naaye.html
　　Internet; accessed 18 Jan 2003.)

(38) および (39) は、3.1.3 で述べたヒンディー語の 'denā'「与える」を使用した許容・許可の使役と統語構造が似ている。先の 'denā'「与える」に対し、ここでは 'pānā'「得る」を使っている。前者は「Z は Y に X をさせてやる」となっていたが、ここはその Y が主語になり「Y が (Z に) X をさせてもらう」となる。ヒンディー語では、'denā'「与える」も 'pānā'「得る」も使役接辞のつかない原形動詞と複合させるが、これらは日本語の「ーさせて・やる／もらう」の動詞複合形式と同じ意味になる。実際、ただ視点が違うだけで両方とも「Y が X をする」という事実は変わらないのである。

4. 結論

以上、両言語の自動詞、他動詞、そして使役動詞の対応表をもとに、他動・使役性を観察し、実例を分析、考察してきた。両言語における形態上の大きな共通点は、他動・使役性を付加する接辞により自動詞から他動詞、他動詞から再帰使役動詞、そして生産的な使役動詞という動詞形態が作り出される点である。また、他動詞に使役接辞を付加する場合、再帰使役動詞が語彙化しているものは問題ないが、そうでないものは使役動詞の衝突が起こり易くなる。

そして、統語面に目を移すと、日本語の「を」使役文、「に」使役文がそれぞれ「する」型、「与える」型の論理構造を持ち、それが強制、許容・許可の意味を具現する。同時にヒンディー語の使役は、前者が日本語と同じく使役接辞を付加した動詞形態による使役、後者が動詞の複合形式で表現される使役であることが明らかになった。また、副次的ではあるが、複合形式の対照分析の際に日本語の使役余剰と呼ばれる言語現象がヒンディー語にあること、それが余剰ではない可能性があることも示した。

註

1) 他動性という概念は、往々にして意味論における θ ロール（動作主、被動者、経験者等）の投射規則を考える際の枠組だが、本稿では自動詞、他動詞のそれぞれに、語幹の形態変化または接辞により加わる他動性という意味で使用する。
2) 三語以上の動詞句による言い換えになるので省略する。以後、ヒンディー語の欄の「なし」もすべて同じ。
3) 「ーせる」と「ーす」接辞の動詞形態について、寺村（1982）は「食べさせる」に対して「食べさす」の方が「ちょっと方言的な感じがしたり、俗っぽい感じがする場合も多い」と述べている。この種の接辞が共存する場合、どちらかの形態が方言もしくは口語として位置付けられるのはヒンディー語も同じである。c. の「生じさせる」や「入らせる」に複合されている「する」の派生形 'karānā vs. karvānā'「さす vs. させる」は、前者が非標準語的とされる。この他にも他動・使役接辞による動詞形態のものには、しばしば非標準的とされるものがある。
4) ヒンディー語の自動詞、他動詞が同形のものは動詞の割合としては少ない。
5) ここで挙げた動詞の中にも、「行かす」「来さす」のような「ーす」接辞のものが口語もしくは方言もしくは口語レベルで存在する。
6) 文字通りは「受ける」ではなく「与える」である。ちなみに「先生が試験をする」という時には「取る」を使用する。英語の 'to take an exam' とは逆ベクトルである。
7) ヒンディー語の受動形は、本動詞の完了形および 'jānā'（元々「行く」という動詞）の複合を以って表わす。中期ヒンディー語の段階では受身接辞が存在し、現在の複合形と共存していた。現代語では、前者が消失している。
8) 使役接辞 '-vā' の異形。
9) しばしばヒンディー語文法では前者を使役 1、後者を使役 2 と呼ぶ。
10) 許可を与えてその行為をさせる場合は、周知のごとく 'make' の代わりに 'let' を用いる。本稿では、埋め込み文の動詞述語の形態は原型不定詞のものだけ述べている。'cause' や 'allow' のような「to 不定詞」のものには触れない。
11) 失業者（chômeur）は Perlmutter（1983）の用語。詳しくは西岡（2000b）を参照。
12) 文語では、ヒンディー語の場合、サンスクリット出自の抽象名詞が、同様の統語構造を持つウルドゥー語はアラビア・ペルシャ語出自の抽象名詞が使用される。
13) 日本語教育の名称「ーい」形容詞のこと。同じく形容詞の名称として固定している「ーな」形容詞は、「きれい・だ→きれい・な」で本来は名詞である。したがって、先の 2.1 の「Y にする」に当てはまる。
14) ヒンディー語の祖であるプラークリット出自ともサンスクリット出自ともいわれるが、定かではない。（*Urdu Classical Hindi and English Dictionary*: 875）

15）この動詞は元々「座る」という動詞で、広義に「乗る」という意味で使用される。
16）インド・イラン語派の言語には対象が生物の場合に与格の 'ko' が付与されることがある。これについての詳細は西岡（2000a）を参照。
17）この場合、語根の母音が '-e-' から '-i-' に変化する。
18）「ーになる」の助詞「に」は、元々「なり」の連用形で動詞「なる」に付いているコピュラ動詞の残骸である。
19）Available from http://www.tbs.co.jp/shiroikage/bbs/bbsFr21.html; Internet; accessed 17 Jan 2003.
20）英語の 'How are you doing?' や 'How do you do?' の 'do' も目的語を取らない自動詞の代替である。
21）この他自動詞となる複合形式に「びっくりする」「はっきりする」等もある。ただし「はっきり」「びっくり」は名詞による複合である。
22）具体的な意味が漠然化し、アスペクト的な意味だけを添える動詞のこと。（例：「しまう」「いく」「くる」「みる」）

引用文献

［文献］

溝上富夫（1990）『ラーマーヤナ（上巻）』大阪外国語大学。

新村出編（1933）『広辞苑第四版』岩波書店。

Platts, John T., (1988) *Urdu Classical Hindi and English Dictionary*, Munshiram Manoharlal Publishers.

Prasād, Kālikā Sahāy, Rājvallabh Śrīvāstav, Mukundīlāl (ed.) (2000) *Bṛhat hindī koś*, Jñānmaṃḍal Limiṭeḍ, Vārāṇasī.

東京外国語大学留学生日本語教育センター編著（1994）『初級日本語』凡人社。

Vyathithṛday, Śrī（1993）*Mahābhārat kī śreṣṭh kahāniyāṁ*. Sunīl Sāhitya Sadan, Dillī.

［視覚資料］

Kaho Na Pyaar Hai, Rakesh Roshan. VENUS,（2000）VCD.

Kabhi Khushi Kabhi Gham, Karan Johar. SONY,（2001）VCD.

参考文献

Barbara Fox, Paul J. Hopper（1994）*Voice: form and function*. John Benjamins, Amsterdam/Philadelphia.

Comrie, Bernard（1981）*Language Universals and Linguistic Typology: Syntax and Morphology.* Basil Blackwell, Oxford.

Dik, Simon C.（1978）*Functional Grammar.* North-Holland Publishing Company, Amsterdam.

Fillmore, C.J.（1968）"The Case for Case" in Bach and Harmans (eds.) *Universals in Linguistic Theory.* New York.

Guru, Kāmtāprasād（1978?）*Hindī vyākaraṇ*, Nāgarīpracāriṇī Sabhā, Vārāṇasī.

Halliday, M.A.K.（1967a）"Notes on transitivity and theme Part 1" in *Journal of Linguistics vol. 3.* Cambridge University Press, London.

Halliday, M.A.K.（1967b）"Notes on transitivity and theme Part 2" in *Journal of Linguistics vol. 3.* Cambridge University Press, London.

Hopper, Paul. J. & Traugott, E.C.（1993）*Grammaticalization.* Cambridge University Press, Cambridge.

Johnson, David E.（1977）"On Relational Constraints on Grammars" in Cole, P. and Sadock, J.M. (eds.), *Syntax and semantics*, vol. 8. Academic Press.

景山太郎（1993）『文法と語形成』ひつじ書房。

西岡美樹（2000a）「ヒンディー語の後置詞 'ko' の機能について——談話文法の視点から——」『EX ORIENTE Vol. 4』大阪外国語大学言語社会学会。

西岡美樹（2000b）「ヒンディー語の重層的統語構造」大阪外国語大学博士論文。

Perlmutter, David M. (ed.)（1983）*Studies in relational grammar vol. 1.* University of Chicago Press, Chicago.

Perlmutter, David M. (ed.)（1984）*Studies in relational grammar vol. 2.* University of Chicago Press, Chicago.

定延利之（2000）『認知言語論』大修館書店。

柴谷方良（1978）『日本語の分析：生成文法の方法』大修館書店。

寺村秀夫（1982）『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』くろしお出版。

寺村秀夫（1984）『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版。

吉川武時（1989）『日本語文法入門』アルク。

〈キーワード〉他動・使役性，使役余剰，論理構造

Transitivity and Causativity in Japanese and Hindi

Miki NISHIOKA

It is generally accepted that causatives consist of three major types i.e. lexical ones, morphological ones and periphrastic ones. Among these, lexical and morphological causatives are relevant to transitivity of verbs. Japanese has transitive suffix SU, SASU and causative suffix SERU, SASERU for verbs. The former is sometimes used for lexical transitive or some causative derivations, and the latter is used for the productive derivation of causatives in general. Hindi also has their equivalents such as 'ā', 'vā'.

This paper focuses on transitivity and causativity systems in morphology and syntax, contrasting Japanese and Hindi. First we discuss the relation of transitive and causative morphology of Japanese and Hindi. After that, we observe every type of the above-mentioned causative types and illustrate the syntactic and semantic parallels between morphological ones and periphrastic ones in Japanese and Hindi.